

後山山荘の再生物語

谷藤史彦

2017. 05

Vol. 3

Ⅱ 豊かな靄別荘の景観

靄八景

「靄八景」は、「瀟湘八景」を本歌とする、靄の浦を歌う漢詩である。「瀟湘八景」とは、北宋の宋廸そうてきが描いた中国湖南省の洞庭湖のある瀟湘の画題で、「山市晴嵐、漁村夕照、遠浦帰帆、瀟湘夜雨、洞庭秋月、平沙落雁、江天暮雪」のことをいう。日本では、近江八景や金沢八景など各地の八景にアレンジして親しまれてきている画題である。与一右衛門は、それに倣って次のような漢詩「靄八景」にしている。

「靄八景」

賽嶺暮雪

離庵夜雨

鳥口晴嵐

平港帰帆

圓寺梵鐘

鷗岩游禽

神原夕照

水島秋月



霞に煙る仙酔島

与一右衛門は、この「靄八景」に従って日本画家に絵を描かせようとしていたのではないかと考えられる。これにもう少し詳しく説明を加えた次のような現代文にするとその景色が浮かんでくるであろう。

日暮れの賽嶺（水呑）に雪が降り
人里離れた庵の夜に寂しく雨が降る
仙酔島の鳥ノ口が霞に煙り
平港に帆かけ舟が戻ってくる
円福寺の鐘が鳴り
皇后島近くの鷗島に鳥たちが遊ぶ
走島の神原港が夕焼けに染まり
水島の灘に秋の月が上る

ここに出てくる賽嶺や鳥ノ口、平港、円福寺、鷗島、神原という地名は靄別荘の周辺のもの（水島だけが遠方の灘を指す）で、四季折々の瀬戸内の豊かな自然をとり込もうとしていたことが分かる。寂しい靄別荘からは、靄港や平港への船の出入り、仙酔島の鳥ノ口や鷗島、走島の神原港を臨むことができる。円福寺の鐘が鳴り、鳥たちが遊び、空が夕焼けに染まる。やがて少し離れた賽嶺に雪が降り、遠くの水島の灘に月が出る光景が浮かぶのである。与一右衛門が別荘に住み始めて約20年の歳月が経っていて、すでに靄の風景が彼の血となり肉となっていたのであろう。目を閉じていても、光景が浮かび、耳を澄ますと鳥のさえずりが聞こえ、潮の香りさえしていたと思われる。

藹然莊八勝

与一右衛門はこれに続けて、「藹然莊八勝」と「依葦海樓八趣」という漢詩も添えている。軻別莊のことを、霞や靄もやが立ち込める家「藹然莊あいぜんそう」と称した。

「藹然莊八勝」

獻春聲梅

朝嗽映櫻

細雨新緑

夕照白帆

月夜金海

満山錦繡

歳晩東雲

銀島布置

これも、説明を加えた現代文にすると

次のようになる。

春が早く来て梅に鳴き声を聴き

朝の光が桜を映し出す

小雨が新緑に降り注ぎ

夕焼けに白い帆掛け舟が走る

夜の月光が金の延板の如く海に輝き

山いっぱい金欄が広がる

歳暮に曙はもっとも美しくなり

雪が降ると島々は銀色になり、

白い布を敷いたようになる

春に梅の木で鶯が鳴き、やがて桜が咲く。夏に新緑が広がり、海に船が走る。秋に月が美しくなり、山が紅葉に染まる。冬に曙が美しくなり、銀色の世界が広がる。別荘から見える四季の変遷のトピックをとりあげている。与一右衛門がその移ろいに心酔していた様子が見えてくるのである。



後山山荘から見える曙の風景

葦海樓八趣

さらに別荘のことを衣服のように薄い
いたいかいろう
海樓「依葦海樓」とも称している。

「依葦海樓八趣」

春窓綻梅

浴窓虹橋

黄梅老鶯

滴泉浴禽

机下舩喚

遠島雷火

閨櫺風月

荒天泊舟

これも、説明を加えた現代文にすると次のようになる。

春の窓に梅が綻び

風呂の窓から島々に架かる虹が見える

黄梅に春遅くまで鶯が鳴き

禽浴の滝で小鳥が水浴する

書齋の下の方から漁船のざわめき

が聞こえ

遠くの島に雷が光る

寢室の網戸から風が入り、

美しい月が見えるが

風雨が激しくなり、

船は港に戻り停泊する

ここにも春の梅からはじまり、風呂から見える虹、鶯の鳴き声、庭の滝壺で水浴する小鳥、港のざわめき、遠方での雷光、美しい月など、靱別荘における朝から夜まで光景、また様々な季節の風物が綴られている。

このように、藤井与一右衛門は靱別荘に特別な思いをもっていたわけだが、こうした文人的な趣味性というのは、与一右衛門が先代から引き継ぎつつ、新たに購入しながら増やしてきた彼のコレクションからも読み取ることができる。その一端も見てみたい。



仙酔島にかかる虹